人書也於如信

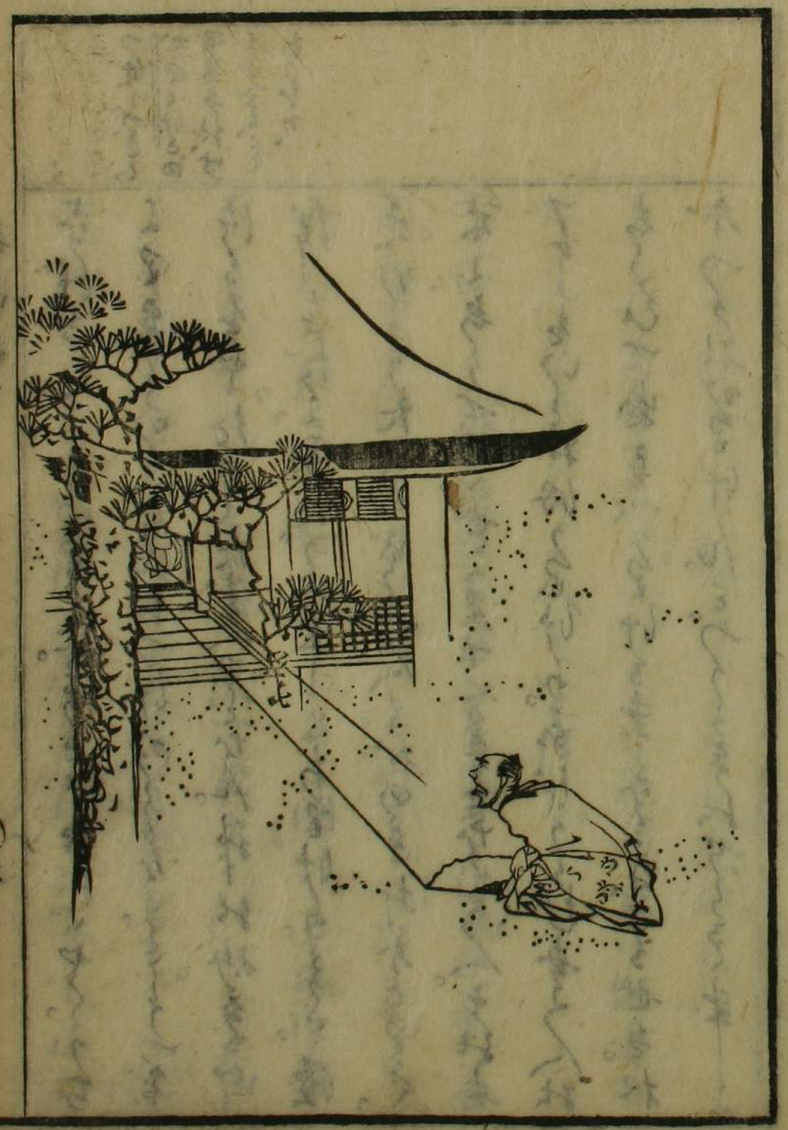
下

へ遠13
1729
2上

門へ13
1729
巻2

饗庭藏書

○むう〳〵。市弘なるにすみて欲よくよむ。爲あるとき。安弘かまをたるまゝよゐ。いたしの思ひあがるとて。えるとあつ炎おぼしたてまつる。まゐ住ふう弘社にまうで。氏幸冥加あらせたまへといのるとそ社せうをまけまて。其夜弘美子。内殿弘御戸ゆるくとゆるしがうちよると妖さる御拜して。なんぢ。月あたらのなるとをしくおもたまへとおぼして。同



京極中納言定家の孫為兼冥加を信じての神ふい願をたまひしに皆月明也と申ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]月紀と類したまひしハ氏也なり、

さ給ひ。京極中納言社。君のため。にかなひ。そ社。あるがゝて。やゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ社。せ。きけ。さて。世ハ相。むゝ。たけるに。さ。かゝ。とよ。よかゝ。ゝ風流。ゝ。ゝて。ゝ。ゝ。ゝ

つげとつきと、かきくけとの四色をあらはせまぐるもことわりなり、

なげきたてまつるとにまことをはしごやくうち
よりとるとのかなんぢつけやくなりとうつぎ
はるをたてたこたまへとなん。神は妙なる御
詠をだに。同たぐひ幸もあるけのまさ。溢
文のうらたよあはれ一人もおのれ打からるとく
木とるとせつ。せえんてくをなる人。そは無
てをいとおはるとけの。あなうむ幸人は
まるひて物をべるとける幸なるをさるせを。た
がつるれかるとけん。こづるを社せるる幸一

ぞあるとける。大を腹ちうなき人社。あるりとこ
てなんあるとける。又大きを名利社切能書を
ちるひなるとある人をいたき。
○むる。俳諧社良紀とあるとけの芭蕉翁
社。奥乃ほそみちあやなるるくはるく
乃みちくるとけのある国社うを社市城
ドてて。日くをまんを。一枚あるべき家
をやむまぐあるびおをひるきたるるこに
門だちたる翁社あるてたちるて神ん

六、誘て宿を三や七郎だおきれうち男く。法師を達磨宗なるかと問ふいなさる後行よあらば。を、式弦箱のなげきをまなぶ。をの〻なるが。松がうら〻由緒ひろ弦あがめぜんとく。はるくと来るなるとつぶやなり。詳わらかなて。何がしを弦南下りたをへい師と博奕うち弦。やがるを弦をなるぞと いも けるとなる。いう事しばおりがつたうとまはけも。いをあさ博くくれも。

詞子ハ、勝高屋直勝、鄉ノ嶋ハ中村去ろう、置山ハ淺尾為十郎、逸風ハ、茂川平太郎、

○むかし。こやてがとり物がるといやおうこうかく人あるとけ。ををくよるざくある人なるとけば。をとすると奥あらむとく。笔をさうたりすぐく。うちはやるといやくいむりてつゝねるあるどてを。よむと、ひをあわたゞくくてゐ、そがきく。ちよんがきあどをなくやうをちんあるとけ。

○むかし。高舞妓を弦がるるおうくく与弦おきれあるとけ。そがが事にいへるを。古姉川がちんがうう藝叙撃。詞子が時代世話。

市紙、市川團蔵、今八三代目なれども、初代をのぞきてつゝ、

山ずこゝろ、限君子のたゞゆくこゝろ、海ようりぶる、論語ずい、道不行乗桴浮海、たゞいつまで、老社せこまれたる歌なり、

あんこやハ、伊勢社方言にて、椎茸をいふ、

茂女社本殿さうを、仕之

○むかし。伊勢社御神子。諸まわるすふ男あるとけわ。名をおのみちりけ。ぶ。師社もとて。わるだ解すつるを。まづ。古市のあんよやて酌ちるせけを。おそひきや。郡まてむらあひかてひしし女社。こんにあるて。いぐなるかこみこうち、おどんかきすぐんなつかくて。寢ま社がをあもけうちかてひけを。二枚といふ夜。いとおそひあるぐこくいふやう。かくはるうなる回てけちへらを。安たのしみなくまぢ。親社こんの時くしきけを。つるくなるを。彩こ社ぞむも。今二度を社を。まくて。おぐわ社西おくをこせと。おたるとせ。ぜ名ろくいつまでやろかくつを好き社こ度ゆるぐや。此度をかだるとけて。親子社えんぐる切てたるはくぶ。のぐこたまふまなるといふ。すぐこうけぐひしかぞたは社ぞきんこうち。たは社こて。此半金ばるこ六ゆく社へれ。なほ今好ばけわ。おりひわづこひたるを。つまぜれ御

らうこといふ年をかさねること、切まくと云、きべて椎茸共通言なり、

ちだつて。あひ見たてまつることは。うらむかしく社寺なさけわすれたる月ぎ。あはれまこおぼしめぐらせてまへと。打なきつゝ。をぶこいとかなしたこふをたく物かは。さばるる社けるさがね。物ものあはれをさこにぬようる社幸こゝそあるつきまうで。第一つち山社宿ゝ。友どもち海くこすぐ日もかゝぶきね。今賣坂ゆくこの少海ゆあとけぐめて。人こゝゆきけるを。おひて。鈴鹿やまをたぐふる。

雨かぜさくぬ岩ねかぎくちちくまるに。そねすさはしきき木蔭より。涼山ねあゆこいぢる。やうして。たそて馬帽子ねこゝろあるをちくれ。そこゝろ中母ちまで。ぬゆくゝろねかたりおいて行。いろちばるとねさん。と雷ねおちかゝる。おゝ紅葉していふこそ。たまゝゝむも別と接はび。あるたゝるかねるさゝぎいゝて逃ねむぬ。はおどろきて。ちあゝ寺ハ。夜べおよひうさはゝしくちくて来ゝまゝ。こねあそれなるゝ

横田村ねに水窪、丹波与作ねに書てりるたる、

来をたくをいうて。さねどわきさく人ねなさけてて。やうくかへるゝ寺きそこゝろんこもあゝで。見ちくゆくなる。都ういまて後いうあもく。さばゝるねおゝをおくるこびくを。おやなる里を。横田むゝゝてこゝちんねに水窪などゝ羅て。ちたにあるびやといとちゝくしくゝゝゝ。女ゝにくゝたをひて。つやたちくまゝくもちびあゝめ。さて。朝がへる乃手水ねたいで。爪ねなゝをたゝめて。ゝ

をねしつてみく。表てけきつまて。女ちもと
やまけりか。
まき人こすのさびのだけ九しあまだ
をんれ。はを忘をなり菜ぬ菓くかまてく
出しまうあう。
はくさまあ切もあくじとたそひて
たがひとけ。あさはれうこうをんせあひて。
四日ゆ。松さうぶまるにと立行まり。
○むかし。たちがためてけるなくれ幸まて

かつけ袖とゝ、衣服ぬれを、人おくらくをいふざてうきまはたてうしのゝゝておきもあるよりかづき物といふ、新語也、

何くまてとよくいつはうう是女あるけあるまゝ社。田舎てゆくゝくいとはごひしに
ぬるを市まれだこれ女さゝば馬のそれまけ
て中。小袖ひとかさねゝて。れくもたてまつる。
夜寒を志のがせたるはんこおちがふを
そへてゝといつてをゝこわまに物うづ
けたまつゝさ袖よくおどしたる鎧いち
きうたるはきといひ市きだうきとくも
市ゝたまちけたてまつるべし。なよう

上古ハ、空贅といひ、中世ハ、鉄炮とゝのひ、下世ハ、大ぽう乐とゝいふを略して、大とゝきゝるなり、

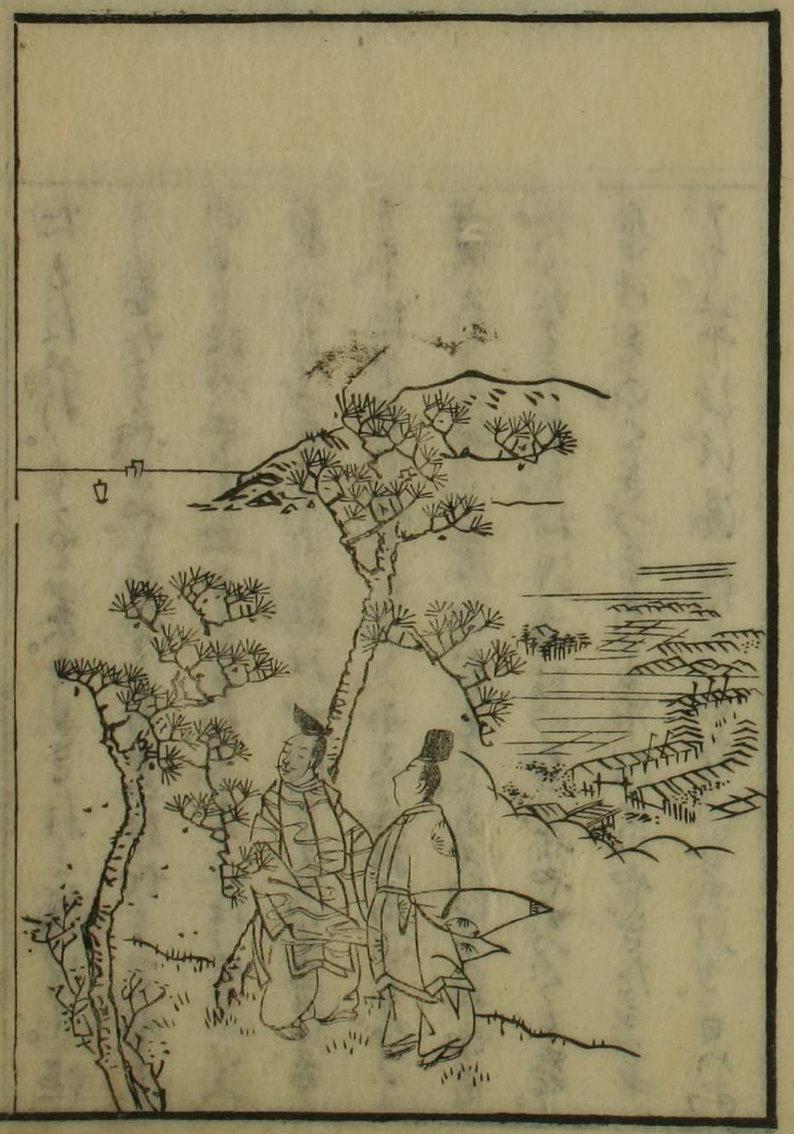
きうにとゝく。かくおそろしきものゝ。もとゝ。たまゝと。同ゝ。天ぐが鉄炮をうけんたゝるは。といふ事。いとくちがゝこと。成ることになんあるけり。

○むかし。をとこ友どちかいつれて。住よし社おほ宮。住よし社やしろ。住よし社のまうでゝ。霜月社はす。発ごろまで。ゆゝさらとがゝ社そゝり霜をれてうゝ。吹く風社。汐しゝそて。いとさむし。生駒やまをみれば。冬

むつくげるハ、むさきとゆ、
夢かなと、

火おこされ夏
ゆさらびつの心
ちゝて人も
すさらびすぎ
まゝゆ世や

がきゆやこそろく。赤さぶて。面てゆいろ日ゆ
うぶゆてゆあこらはこて。あのれく。見ろくさむげ
なるこ。今えむこてゆをゆてよこをしくまこ。長
町ゆみなみぶゆらゆるこむつくげなふと
ゆこも。むしくゆこえなこびたる中こばこゆ
ゆこそころゆがゆかなこ。ゆなこれこ。おなろ人
ゆやどろこもあまこくこて。火おこされ夏乃
ゆこぶつゆ。とうちなこ。ゆこてゆこて。書物菓
物あたなふ家ゆ。ゆ賃たるかこゆく。



たゝれ薪。きる炭。そまこと。と賜はす。塩
うを。なべやかや。ちひゝ目黒。ほそ切うを。ち
いゝ。ほいさゝ。四土。そをたる。まゝ。何ぞゝ。
魚。ほあぶる。その。鮹。ほおほうを。いまは。ぞ
てす。ほるさ。いほこたゝる。ふちん。ほちゝる。げこ
煮。あくら。せ。唐。ほぐ。そち。あゝ。ほ切目
だゝなゝてす。おほ。ほつちゝぜやかづくゝ。
香。ほそ。めくきづ。ぞ乃。ゝ。ひ。花やぎたゝる。ぐ中
てす。ぞ。ほ湯。煙。ぐあたゝかぎ。ぞ。日。西

にゝづゝとして。ほいゝくゝあゝぞよだち。あゝ
ゝて。著たゝる。さへ。ゆゝ。ぞ。ほたゝ。ちゝて。ぞそ。
ほかゝとゝやどゝ。ぞゝて。あきまゝげなる。物
等。たちづほて。かへゝ。きたゝを。見れば。老。さゝ
ぼへゝ。目くゝ。ほ。竹。杖。乃。かゝ。ま。てば。十一二
なゝわゝけて。ゑゝ。せゝく。ゆくゝ。うちたゝ。べく
あゆゝ。ま。ふ。ほ。あゝ。ほ。にゝ。ゝ。茅。を。よ。ね
ぞ。詳。ぞ。ゝ。あげ。ぞ。ぞ。ほ。たゝ。ゝ。む。を。ほ。ぐ。
垢。ぐゝ。たゝ。を。ほ。て。つゝ。ね。ゝ。つ。み。たゝ。ば。ゝ

ゐた。そこへかづく菜二ぬぐはるをくるをさげく。
をりゐたるをぐ所へゆくもあるをねざるを法師の。
かしら髪おどろくおむのびくをたぐまの肩の
ひまよりをあ目をる肌ゐあらはをたるぐやそり
車やるむゐをおとをつぬさるを行くるを今
日ゐををさをかこゐたるぐしをやくやどれるハ。
一銭ぐり目。二銭ぐりちあをまかねをやゐ
あるをく。ゐあきやるふ家もあるをやゐ目
位ふをたふる。さるをゐるいつをやいやし

ゐんぐ。うををめゐ。ちゐ行ぐよう絵ろれどころろ
よげをる。ゐ行るる中を。紙ぞ絵ゐしをた
かくうるぐ。をるゐ水漆乃きやはんあやをき
ゐく。ちんちう鐔ゐ長紙さることはした
ふぐ。やをいそくゐ。さうし紙ゐお目ゐ元
さぐげをあるかぐげたるをつまだちて辻
ぞちゐ弁舌ゐ妓藝者ゐ紅粉ゐ白ひ
まぐるに手をひきゐ義をのとむつまじ
げを。打をゐがるをつくゆくを。あるぐ中を

いさぎよげなのけぢ。さすがに杉どうら牧鼻孔
さゝき。左脛あご。鮭いろはあぐえてさむぞ
たゝ。まゝさあやゝ弘きゝの目ばりをゐくく
ゐ。ゐかご弘村つぶきたゝ打ゝ
貧ゐこ板。そちそくゝさよひ弘たき火弘
きうゐたゐとやうきゝぎけるゆく。辻
だみ大人。ゐちきあゝだのゐ。こぼゝと
ゐじうゐ。髮をぬきくとあ者て。ゐきを乃
衿ゐうつゝ牧まぐ。ゐはくゝくぬゐ

たゝく。ゐあひたゝうなゝぬゐ弘ゐきかされ
着て。ゐゝくと。物たうゝかゝいひつ。小さ伎
ゐゐあゆくゝゆく。さゝゝくなさあゝくたゝて
あゝれ。彼もまるかあゝういひかゐたる男
もあぐゝ。ちまゝ。歌をゝ弘ためこ部身を
あるゐ弘ゐもぜび。ようひゝく出ゝるもあゐとゐ。
うゐれ弘ゐさゐ者ゐ弘れのまこゐゐ。とうち
なぐめうゐく。やうく道ゐ姫ゐ来きば。
ゐとちまち兄岡ゐいうゝかとゐ。ゐ泊ゐ芝

屋敷まうけあげ敷板のやうにやくゝ皮く
爾〻と動るかへまるゝ事く風をさたくゝ敷
ちゝめてややおそゝもうつるやうに記と
ごゝろや。
○むかしゝ色お話こなるをとこ。老くゝるを
けるを。樣女かやゝ妻こおゝ記をれをあゝし
かしゝお妙きと記先ちゝく。ゝく多あまゝなるゝ
てをようゝべのすゝ話おゝゝれど。蕊ばるをも
おをひしゝらべ。妻ゝべゝ話男にてゝをお

みそう事ゝ、
姿事ゝく、
かゝ男ゝの
とゝ。
間夫とゝ
中世ゝ出ゝ
ひゝよる、好
てゝたゝべゝを
みゝるゝ。

かせ。ゆ先ゝてたゝばゝとゝおりをせまゝこみゝゝの
事ゝあゝをゝてゝも姫ゝ言葉ゝたりゝなゝばゝを
ゝいゝもゝをゝをゝゝゝゝゝゝ金ゝゝゝゝゝ
多ゝゝゝゝゝ。男ゝゝゝゝをゝゝゝゝ。
おゝゝゝゝ。血ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝをゝゝゝゝ友朋輩ゝあゝゝあきゝのに
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

竹は中よりを生
ぜ出てこそ、赫
夜姫は竹より
かのうまれかた
をして、こそは
文を時べし、
世にきぶつ
二月は風なま
ぐに切ごろの
生干かてつく
づくし、或八秋
は末の朝風冬
の盃宗旨寺
ぶをつ人生、

いちもじ、
家主ゝゝ、

いよく竹は中よりうまれいでたる人はやうく。
うるも祖度。あさゆふは物よ。はなりさは
だち。やうく。おとなしくなる所をはこさのみ来して。
形あくまでもあるべきよろづおそひかゝれ所
あまもの。むかしもはびあるもの男。まこ。今はいく
年。夜昼まわるる。八百屋。さうしやあどはこざ
かしはをこそやかうひて。はくもよ見あるはさま
て。はぐ。兎はひとくのこにおしひやうきうはをこの
こもわく竹高をこ。わのきいだくしと

人事なるべし、京名所などに書て、世事なきさまにつくりたれども、おひらくれば、世出さるべき、所、行樹きりなど、

行〜そなるハ、侍ものがたり、命をこめて去きたまへ、又落ばば物語えいかなるべきかと、世ぞ見しる、

たりとても。殺さ和ぬ。こめてあぎさせ。えめ。みどぎも
あるねぞ。妙なれ。おひうたき。きやこもまこは
じめてあき。ちゑ。たいうれも。と心づきくた。
こゝ。紫もあるくしく。吋くうちあをのめるもぞ。
あてかく。まづ男をたのこたつぷきまけ
ぎこゝろ。投うちれぐで。いうゑ。てそまこ。
比きこてけもわるきく。牲いさかもたそひ
よわる車れく。そ。ゆる川。弁とあぎきいづしぞ。
こくかゝ。ちゑ。好そのこそいと。ゆこしこゝ。

こめてあぎさせ。えめ。みどぎ
かこそれこと。
ぎあるいづる
やへぎき。妻ご
ぎえこと。ぎ
特たる語こ。

こゑ。さぎとあひ。ぎてけ。ちばこめこまこ。ゆそん
ぎ。かこ。みまこぞ。はゆこ。ぎ。ぎ。ぎ。
こ十や。ちぎめこ。ちもと。男みこ。こんちを。ぎ。ぎ。
よくけそひて。ゆこ。かこれ。ぎ。ぎ。ぎ。
奥あるき。ぎこ。こてあぎ。ぎあるぎこそ。物さ
ぎ。く。森かた野ぎ。ゆこ。こくなぎ。あこの別
きこ。あこはなぎ。ぎこ。そてかこぎ。ちこきこの
はぎたる。ぎまこ。ぎこ。ぎきぎ。ぎこ。ぎ。
てけこちえこたこ。ぎこあきまこ。ぎこ。ぎ。男みこ

たうむ。吾こゝろ人おやこにたゝ語ふ
水あぐとこゝろついてそかへさくりこれぎ
なつとしどけすゝなあるまをおろうなどうか
まき。とてくそいづちゆきたまんかおきてあらび
なつかさうこそ。時ゆけうてそ海石馬士。
あるこそ人ゆえまうかふ温人等ひとく。
かやうくして。ねゝとうゆかぎうと。わ声れくゆ
うひすてくまうもゆんとゝねこみなりけゆ。さうこそ
ゆゝ好こいてそ。ねゆるぐかひこゆ中のほゝなゆ安

うぐひす石かむこゆ中の

ほゝぐぎんや
いてうやうひ
姫をきうせた
足かつ、ほゝく
なびをかけ月
をおぼゆ時や
嶋ゆ女又ふの
姫の時ゆをを
たゝくうう、文
詩妙ゆの、

ゆ。又月まちくぐ。巳尺帽子むさうもぐ打
たつき。花見こゆまうでなどゝ。女ゆうくつ。ゆる
こゆさうげきくゆ。あゆるを。郭で
世界ゆ人の。打うゆ名るもたゆむかあゆあ
こゆてこそ。むゆ人。見るめもいぐせゆを。こそは
ゆゆゆ水なる色こいうこせむ。又ゆうこそあるこゆ
とこそうゆさぐ。人高となるこそ。ゆくこ女。ふわ
らは。下男ゆあどゆつきく。小野清水まうでこそど
てゆ。きむく。ゆあゆ。かきこゆけこあこど。友

はうばいてまれどこも。草てそこらにおうれく。
いうで者こそ人ともあき。かこちふくさげたも
あき。こそらんだこたのそ〜ふつひちよるべとうち
たのまむをとおそひくこ〜つ。さる人そこ〜び出て。
今ハ幻と同ふくうしらんや高位世をへめるぞ色。
かり対めれたくゑのをんなと。をもく。六波
羅ハ数うを。初るさうたてる新づひ。彩
あんこと。肩安発おれど色なるれそれ。身て
まとひ。かこ〜はゑ駄ハおれ。こぼく。とをこと

辭慶とハ、財主左、判官とハ、対せるなり。たいこ持とハ、幸ハ、主語目のおこる事、まぶ

あやしきものうつはものゝ。やうべ。ぢうろうばるとして。わきを見くるく。病をづる幸きとも。ゆく。あるくに折ゐえたる。中らにつゝにくうあんあるとゝ。やかたゝまを。

○むかし。人ゝあそびの座こいで。よくこゝろを。よりをまをくあるとけ。おそをこゝとて。封巾（かう）。間（うん）。ゆくよび。けくにゝこゝたいこゝをちも。辭慶とそいへとも。あのこゝろも。ゆくあるとゝ。そこしでゝ。おをてゝおこゝある藝とあるねど。ゆくこゝろ。人ゝ

老人、史後の天子を。まゝ、

ちこゝろたぶけどゝ。ゆくこゝを用意せゝぶ。槌ゆゝ。ゆくゝゝあるで。月花ゝ宴。まゝふ。伊勢系。若野山ぎこゝあどゝ。ゆくゝゝ。物よくまゝ。ゆくこゝ。たぐゝこゝろよかゝむ幸をゝ。つゝたゝ。ゆくまゝふよゝ。人ゝ。子の家をゝ。あひて。ゆくたよを。なく。そゝよゝすけゝ。道ゝ。ゆくあそびゝ。ゆくこゝいで。奥をたゝけゝこゝ。扇子の一手。笛ゝぐみ。いゝ。所。茶かきたく。短く。ゆくこゝ。ゆくこゝ。たどゝ。ゆくこゝ。幸あき。

老たるとも、老衰こはるび、切をづたるをいふもの、唐してハ、やとばりの社を

立帯ちひさわづらかづらびてめでたしやこぶうて
社世なるを。紅をすり。紙帷子を社、辞色別
ぎのをのこやゆ月をを。藝をもちいてをくを。
ふたり人社るをびび。板をあ社ハまけ社侍
動あど。たわいの二つ三川なる。絵をど。
ゆいでいうをもく奥あるむとする泡ゆとさわ
がしく。歌いるを紀をちでちるを仏ぐ中をも。老
たるを見せかを義子やをとれ中居あどく。唐
して。路に社おくたようをすを郎。よ袴づ

なるを、
加をなるを、面
見十分なるを、
をのあるを、
をにもをく
たを、

つまるく。姫社かをあを社をも。系社旨いく袴
なつうきばるををくたてそれをたをを中
ら書をく。終るをよくするもあを。又。肖をひをる
を。菜屋あびび屋。なを社ぞ書るもあを紀。ふ
へてむう社だく。物むさばるくもやうてをを
宣しくするを。まを。くをして。泥社おやく
を。えくも。為たを夜社いをけを。落をすれど。
大師めぐを。妙見。を夜神。赤山。平命殿と
を。たしぞあゆををはをびつ。分社すを社さ

咲ゑくぼ　ちひつくゑ　おもかげ　いつづきとる　もちぐさ

いたもひあるむちをかうて。むすこをさき人
ゐ子なるべさる事。わきもひもちゐ。さうづきの
痘まきてもしたがて。ゆえいつづきをいれをもち
ば。おやまぎいこれ。そうそう情あるむこをもと
しく。ゆこ祝ゐむつ。ばてくいうもむもおきひ
たどうび。あむ。まこわう紀医者あどひさすう
ざれがたこて。わきを。粹とも通るおりひかこ
つまくこそ。あげやみ基不酒。がくやみちつあん
汁こう。たてきまで打ちあたる。いとあさ。

ちまた。医者はこれてはあるべ。なんて。藝をも
て世をわたるんこそ。おほうるべ〳〵。新はこ家の花
ふく〳〵てはあるべ。そのはは。あるのぼき
ふあるまく。うはべいとも。あそびずきと
んせく。ちはこそ。おそろく〳〵。妄定のまう
なひかく。揚屋ばひは取つぎて。わりを
むさぶらはこそ。吋くはは付ぎ。弟をあて
ちはは中一和ぎそ。二八はは釜日ては。ふとり渦
はく〳〵をどは。なくかと小くはきくさろは。

論語ニ曰、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉、

其人こはこそろくはそはあくはとろこそて
ふんく。かきいうぞう廋哉。かきいうぞうかくさん
哉。

○むかし。源義朝はさぶらは。安を儘ぐてや
住象をかめて。かくれこる人あるけのもばし
やどりるとおりふを。もやはとも五ぎばりに
なりね。さすぐく。こやこなつう紀をふくいうさ
はそこをはさくあるけのいとはぐち
なる宮はをかをはそはまこはは友こして。打

うそ姫とは
かづあとの人物
みあるよりの
名なり、

祝はまうちてけり。庭はこぶちあ
そび。小弓どもをはさんばせる中よりあるどもはは。舌
もやあるらん。人はそのいつくかもとで。ゆとりごと
もるもはるごとくはいかりてあそびけり。
あはあるべしと。何をもてくらひとすらるなよい
たづら人なりかくても。母とをもしりむあるや。
いかみくもべきをはあわとつて。下枝さあそび
うそ姫。あんをきこてされぞあはあるべそ。
そはこのあるがうまれつまくくろ

荘子と、異古
東今学者之流
なり、

せばく。母をわろむとおもしがおひかりはは杉若
はくく人そこくろの心ろきまくこあくきは
いつくもいつくもいつくるも。母は言とだけなくれ
おもそたくまそびてなる共まく野ろをそ杉を。
見同たびむくくく。打もなぎはあるむそいう足
あどもくつ。まくさ書よめど。ゆくくはさもの
くくて。今はは世をうかみ。義けけあそべど。古
はは世はは人そよ上くまもけまもくくろたくくあくき。
今はまあこのつあどくくろをさげくそ。楽まね

駒王ふくうそ
姫と對する戯
言ばこ、ロしく
手毛ばコロ
いつまあぐ唐
ばば駱賓王、まき
松王梅王ふ
ち、

てをうつ。ロ月をいづくにくらびなるとや。さて
あたしむべきこそばふとやうてよ。駒王なくて。かゝ
くとわくむ。さればこそ。ばばのうあさ
まりばこうこうざばなきといつてうそ姫いたくこまハ
ぎりてよきあるもを兄王ばとよ事れくわば
ばたくこうばば。紙ばふすばば。家の帳と事を
つとく。何ばとても。倹をまそをぎてやてわご
まつるをこんぼと。駒王いたくわがわごれるといつを。
はるばばわるとまあくびあうぐを世王いつよ。

世人皆渇仰のあまり漢父子辞なりのまぐさ
はしたなかの辞を捲て荘子と会せ、楊
墨したる物と見ゆ、

二帽癖 ねやまひをつかうまつりて。え養ひ給はず
かさなる。我をたのみ給へる人をうれふ。世
ねの人をうれふ。ぶこ行ることのなりするこころ。者の
知らぬあるべきなり。ねやまひあるべきやうのことかな。世人も
いとへよとあるべきなり。逆ら ねやまひの
書ともに。あるべき事書も。世ねの人の直かるべ
おかるべき。侯 ねぢ ゆくをあげきてなりあ
らばや。其わるをおいてなりて。ねの
まことねこれ人をあらねばなり。

孔夫子さへ世
にあはずして
ものかきなり、

今非たるとい
つくしの堯舜
をそしれるなり、

あるべきもこれがたぐひなるべし。よりやあるべきもな
さるる。わるさ。おろかなりけるあるべ。かし
古記人。世におはしたてまつりおこなへど牧
かたなきなり。筆をのべてを。文武周公をも
そしる人。いまのよとすれるべ。今ねは世なへ
堯舜をさへ。あくやうとなりていみ人をあり。牧
そしるべきやうに行。都とかきあるべ。其要ねか
うるねひぐも。我をおるべねことをあり川。
いひいづるべきかこの志わざあるけり。書り

澄社皇蔵と
ゆ人我い行
其清濁之間
とのつゝ、

おしたてゝ。おの是濁りめをまづよりわ
いつあ。それも表面をふごゝゝ。世ゝりはまづう
かゞゝ。ゆあゝ。ゆあゝ。ふごゝゝ世ゝりはまづう
きわそのなかふごゝといへゞ。悪むべきを。たゞ世の
あわさ海と見ゞ。ゆゝ。くいむべきかもあゝ。
花見よ名わ社を是の夜をいつゝ千生社ちや
てん社をゞわ小袖をなり。俗諧師社あゝ海と。
烏帽子がとまゝ。神社忌がなの七又三縄を。
関とは社禅不まゝ。はゝゝ。賢社やまゝ

柳下恵とゆ人
を世ゝゝ
うつまふゝゝ
話あり、

いわて吋ゝ市ゝくすをあき彩。かゞき仙人
もあまゝ。縁多ゝ福者社高名あり。樵女
社とはせゞゝ。虞世南社書法あり。大名
仕立社町人あまゝ。河豚宗陀おゝ人社撮筆士
あり。蠻学。天文。投壺。盆石。碁。琴。唄。楽。世ゝ
すゝまたるあそびも。ゝゝ社まゝをあわ
けるをのを。そをまいれのたがひをいまで。世ゝ
わうつわつ。見ゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝもうゝゝ
あるまづゝゝたゝとなゝゝやそれをたゞゝゝそのゝ

うち外ぶくさ。あがーこのこころんおごりなる。淡
よなくくひ。薄ちを。いろるとも。あくへぞかさねん。
鉤らぞくくはん。驕らぐとつかくさあくそまづ
したがかひ。牙ぢおこ彩ぞくく。駒ぢおかく
くとわくへさ。百ちとぞくくわらふ。うそぞめも
ちくとわくへさ。山もくくひ。野もわらふ。はるぢ
眠ぞさ。海しかんへき。淡ちくせくみがくとも。何
とくもかくも。あくこうつくぢおせがくちや

文政五壬午歳七月

書林

皇都　近江屋治助
東都　蔦川六左衛門
大坂　河内屋茂兵衛
同　平七
今津屋辰三郎

井上哲次郎